

豪ドル高で何を警戒すべきなのか

マーケット エディターズ・吉田 恒

個人投資家に人気の高い豪ドルは、6月1日の安値から、約2か月半程度で対円、対米ドルともに1割以上の上昇となりました。そこで今回はこの豪ドル高の行方について考えてみたいと思います。

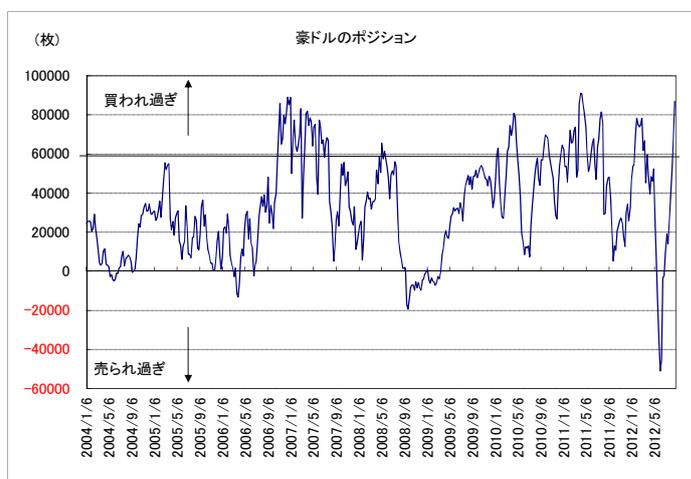
最初に結論を述べます。一部には豪ドル売り介入警戒感も浮上しているようですが、さすがにそれは1豪ドル=1.1米ドルを大きく超える豪ドル高となった場合の話ではないでしょうか。ただ、経験的には豪ドル「買われ過ぎ」限界圏に達していることは間違いないため、その反動は要注意ではないでしょうか。

豪ドルは、6月1日には74円台、0.95ドル台の安値をつけました。6月中旬のギリシャ再選挙を控え、世界の金融市場が異例の「不確実性」の前にリスク回避を進めていた局面でのことです。

そんな豪ドルは、8月に入ると83.5円、1.06ドルまで反発しました。ほんの2か月程度で、対円、対米ドルともに1割以上の大幅な上昇となったわけです。たださすがにそういった中で、豪ドルの「買われ過ぎ」懸念も強くなっているようです。

《資料1》はCFTC統計の投機的豪ドルポジションですが、8月21日現在で買い越しが8.6万枚に拡大しました。ほとんど過去最大規模の買い越しとなってきたわけですから、経験的には豪ドルの「買われ過ぎ」警戒域に入っているといえるでしょう。

《資料1》



また、ここに来て豪ドル高の行き過ぎをけん制する発言が目立ち始めたことも、市場関係者が気にする要因になっているようです。では、政策当局の豪ドル高懸念はどのように考えればよいのでしょうか。

今年最初に、豪州の中央銀行である RBA の豪ドル高懸念が注目されたのは 2 月初めでした。RBA は 2 月 7 日に発表した声明の中で、「交易条件の悪化にもかかわらず豪ドル相場は上昇してきた」、「豪ドル高は、RBA の従来の想定を少し超えてきた」との認識を示したのです。

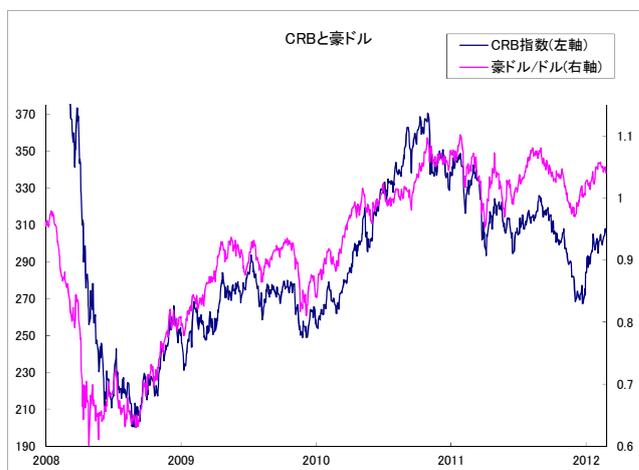
この声明が発表された当時の豪ドル相場は 82 円、1.07 ドルでした。対円はともかく、対米ドルで 1.07 ドルに豪ドル高が再接近してきたことに対し、豪ドル高をけん制する動きが再燃してきたのは、このように見るとわかりやすいといえるでしょう。

では、この 1.07 ドルを超えて豪ドル高が進むようなら、政策当局が豪ドル売り介入に動く可能性はあるのでしょうか。専門家の間では、豪州の外貨準備の増減などから、半年程度の一定期間内に豪ドルが一方向に 2 割以上動くと為替介入に動いたとの理解が基本になっているので、それを参考に考えてみましょう。

上述のように、6 月 1 日の安値から、豪ドルは短期間に比較的大幅な上昇となっていますが、それでもまだ上昇率は 1 割です。6 月安値から 2 割の豪ドル上昇なら 1.14 ドル程度といった計算になります。その意味では、本格的な豪ドル売り介入の可能性が出てくるのは、やはり 1.1 ドルを大きく超えて豪ドル高が進んだ場合なのではないでしょうか。

さて、最後に豪ドル相場と相関性の高い 2 つのデータについて検証してみましょう。まず、**《資料 2》** はコモディティの総合指数である CRB インデックスと豪ドル米ドル相場のグラフを重ねたものです。代表的な資源国通貨である豪ドルは、このようにコモディティ相場と相関性が高いわけですが、最近はやや豪ドルが上ぶれている感じがあります。

《資料 2》



《資料3》は豪ドル円と NY ダウのグラフを重ねたものです。これも比較的相関性が高い関係が続いてきました。ところで、コモディティ相場も米株も、FRB のQE3 の影響が大きいと予想されます。その意味では、9月にかけてのQE3の有無によって、豪ドルも高値波乱含みになる可能性は考えられるところでしょう。(了)

《資料3》

